

弥生時代から古墳時代 ～何が進化した？～

前橋市立南橋中学校

1年2組 永島 諒

1.研究動機

僕は昨年、福岡県にある祖母の家から佐賀県にある弥生時代の遺跡、吉野ケ里遺跡に行った。吉野ケ里遺跡には、大きな建物や剣、大きな堀など、群馬県にある古墳時代の遺跡の再現のような豪華な建物がたくさんあり驚いた。それと同時に、僕は「古墳時代は弥生時代と何が変わったんだ？」と少し疑問に思った。吉野ケ里は弥生時代最大級の遺跡、群馬は古墳時代の東日本の中心である。僕は、この2つの違いを、衣食住、墓と埋葬者の装飾品の2つの観点で比べることにした。

2.比較

<衣食住-衣>

弥生時代には、庶民は木綿で作った貫頭衣（かんとうい）という粗末な着物を着ていた。上流階級の人々は絹で作った着物で、貝から抽出した紫色の染料、茜という草で作った赤の染料で色を付けていた。木製の靴をはいていたと考えられる。髪型は「みずら」のみだった。また、上流階級は、紐に通して胸飾り・頭飾りにしたガラス製の管玉や、貝殻を加工してブレスレットにした。古墳時代と同じように、宝石が勾玉にされた。これらの飾りは墓に埋められた。

▼貫頭衣



▼貴族の服



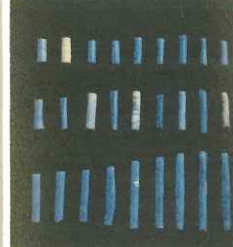
▼木製の靴



▼貝製の腕輪



▼ガラスの管玉



古墳時代は、庶民は弥生時代から変わらず貫頭衣だった。ただし、男性はズボン、女性はスカート風の「裳」（も）を着用するようになった。上流階級は、男性・女性ともに左前で布を合わせ、男性はゆったりとした袴、女性はスカートをはいていた。装飾品としては、管玉・勾玉を使用した首飾り、金属を使用したイヤリングのような耳飾りなどがつけられていた。また、水晶や琥珀に穴をあけたものを紐に通して首飾りにした。大きな冠もあった。ヘアスタイルが複雑化し、身分の高い男性は「下げみずら」、身分の低い男性は「上げみずら」、女性は「古墳島田」となり、一目で身分が分かるようになった。帽子を着用したり、男性もメイクをしていた。これらは埴輪からわかる。

▼男性の正装

▼女性の正装

▼勾玉

▼冠

▼耳飾り

▼埴輪に残るメイク・髪型



<衣食住-食>

弥生時代には稲、小麦、アワ、ヒエ、小豆などの穀物が栽培され、これらを雑炊のようにして炊いて食べていた。また、木の実類は縄文時代と同じように食べられていた。シカ、イノシシなどの動物、アワビ、カキ、マダイ、マグロなどの魚介類、カモ、キジなどの鳥が食べられていた。ウリ類の野菜を栽培したり、山菜・キノコも食用にした。また、塩を作る技術や、酒を作る技術が確立された。



◀食事のイメージ

古墳時代になると、住居の中にかまどが建設され、調理器具も丈夫な須恵器に変わり料理の幅が広がる。炊くことのほかに蒸すことができるようになる。また、道具の技術の向上や用水路による田の拡大により食料の安定した生産が可能になり、狩りをあまりしなくなった。肉や魚を塩漬けにして保存できるようになった。また、燻製・干物に加工して長期保存が可能になった。



◀青線で示したところに用水路がある。

<衣食住-住>

弥生時代、人々は竪穴住居に住んでいた。また、竪穴住居のほかに高床建物、平地式建物があった。主に住居用として使用されるのは竪穴住居で、高床建物は主に食料などの貯蔵用だった。平地式建物はあまり数が多くなく、倉庫として使われた。ムラの隅には物見やぐらが建設され、敵を監視した。敵が入ってこないようにムラの中心部には柵と溝が作られた。また、大きなムラには儀式のための大きな建物が作られた。竪穴住居の中には炉があり、焚き火で調理をした。

▼竪穴住居



▼高床建物



▼物見やぐら



▼儀式用の建物



古墳時代になっても、庶民の家は相変わらず竪穴住居もあったが、平地式住居も使われるようになった。弥生時代と違い中心にあった炉がなくなり、代わりに隅にかまどが置かれた。なお、平地式住居は、壁などが薄いため夏の住まい、竪穴住居は雨に弱い壁が厚く丈夫なため冬の住まいとされたという説もある。平地式住居には、土器などの倉庫とされたもの、酒を造るためのものがあった。このころ、馬や牛などの動物を飼育する小屋が作られた。豪族の家は、弥生時代の柵・溝と違い堀の中に作られた。また、建物の様式も、竪穴式から平地式に変化した。堀の中には、水道橋が外から引かれ、水が使えた。

▼豪族の館。黄色で囲ったのが水道橋、緑が豪族が住んだところ。

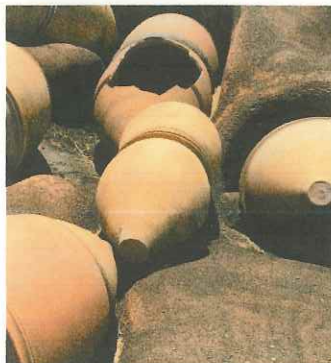


▲古墳時代の榛名山麓のムラ。赤が竪穴住居、緑色が平地式建物、黄色が動物の飼育小屋。

<墓>

弥生時代前期は、人々は「土壙墓」（どこうぼ）という土に埋葬者をそのまま埋める方法で埋葬されていた。やがて、土壙墓が変化し、九州を中心に広がった甕棺墓（かめかんぼ）や、小さな「墳丘墓」と呼ばれる棺の周りに盛り土をした墓が見られるようになる。弥生時代後期になると、墳丘墓内に甕棺墓や銅剣、ガラス玉などを埋めたものや、大量の青銅器を埋めたものなどが出来た。

▼甕棺墓



▼甕棺墓に埋葬される様子



▼緑が甕棺、青が銅剣とガラス玉。



古墳時代になると、墳丘墓に乗せていた器台が変化して円筒埴輪ができる。4世紀中ごろになると、家や武器の形をして、王の権威を示した形象埴輪が完成する。5世紀には、王が生前行っていた儀式を再現するために動物埴輪や人物埴輪が登場する。また、墳丘墓の形は変化を続け、古墳時代初期に近畿地方で前方後円墳が出現、5世紀に入り、前方後円墳は全国に広まった。現存する群馬最古の前方後円墳は、前橋市にある前橋天神山古墳で、四世紀に建てられた。しかし、6世紀後半になると徐々に新たに作られる大型古墳から前方後円墳が消えていき、方墳が盛んに作られるようになった。しかし、小型古墳としては円墳が古墳時代中ずっと作られていた。また、特殊な古墳として、主に皇族が葬られた正八角形の八角形型古墳や、円墳の一部が飛び出たような形の帆立貝式古墳などがある。埋葬者は、主に弥生時代の壺などから進化した石の棺、石棺に埋葬された。石棺には、主に2つの種類の種類があり、石をくりぬいたものと、石を組み合わせたものがある。また、弥生時代、棺はそのまま埋められていたが、古墳時代になると石室に埋められた。古墳時代初期は、古墳を上から掘り、石で壁を作った中に石棺を入れ、石をかぶせて埋める竪穴式石室が主流だったが、のちに、古墳の横に穴を掘り、中に壁と天井をつけて石棺を入れ、穴を石でふさぐ横穴式石室が主流になった。なお石室は、死後の世界、つまり黄泉の国を表していると考えられる。また、円筒埴輪2つを組み合わせた棺で埋葬された人もいた。

▼前方後円墳



▼帆立貝式古墳



▼八角形型古墳



▼円筒埴輪



▼形象埴輪（家型）



▼形象埴輪（武具型）



▼動物埴輪



▼国宝の人物埴輪「挂甲武人」

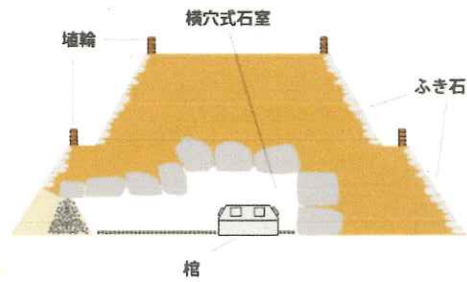


◀儀式を再現する埴輪たち

竪穴式石室



横穴式石室



<埋葬者の副葬品>

弥生時代は、先述した通り銅剣やガラス玉などが副葬されたほか、銅鏡や貝製の腕輪、国内で4点しか出土していない柄付きの銅剣などが出土している。一部の甕棺墓には、絹でできた服を着たまま埋葬されたものもある。また、甕の内部は朱色で塗られており、高い身分の人が埋葬されたと考えられている。

▼銅剣



▼銅鏡



▼ガラス製装飾品 腕輪

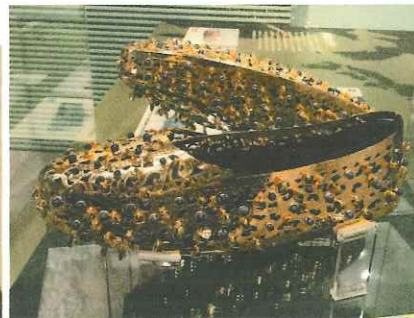


古墳時代になると、金や金銅製の副葬品が多く登場する。金銅製の帯や、金メッキの宝石がついた靴、金銅製の冠など大量のきらびやかな副葬品が出土している。太刀や兜なども数多く出土している。中には朝鮮半島と同じようなものもあり、日本と朝鮮半島の間につながりがあったとわかる。また、群馬県らしく馬具も多く出土している。例として、たづなをつなぐ「轡」(くつわ)や、人が乗る「鞍」(くら)を装飾する金具、馬の後部を装飾する「雲珠」(うず)、「辻金具」(つじかなぐ)、「杏葉」(ぎょうよう)、乗馬中に足をかける「鐙」(あぶみ)などが出土している。このことから、古代群馬で大変馬が重要視されていたことが分かる。

▼金銅製の帯。日本で鈴付きは群馬だけ。



▼金メッキの靴(復元)



▼冠(復元)



▼轡 (くつわ)



▼鞍 (くら) の金具



▼鐙 (あぶみ)



▲雲珠 (うず) と辻金具 (つじかなぐ)。▲杏葉 (ぎょうよう)
中央が雲珠、それ以外は辻金具。



◀緑が甲冑、赤が刀、黄色が矢、青が短刀、白が矛。

3.まとめ 古墳時代で進化した点

<衣>

古墳時代になり、服の形状が進化し、ゆったりして動きやすくなったと考えられる。また、金属の加工技術が進化して装飾品の種類が増えた。さらに階級によって髪型が異なるため、身分の違いもわかりやすくなった。

<食>

須恵器やかまどの登場により、調理方法の幅が広がった。また、食品の加工技術が上がり、長期保存が可能になった。水田が改良されたことにより穀物の大量生産が可能になり、食生活がよくなったと考えられる。

<住>

簡単に建てられる平地式建物の普及により、生活が楽になったと考えられる。夏と冬の季節に合った建物に住んだため、快適に暮らせたと考えられる。また、豪族の建物も、堀に囲まれているにも関わらず水道が使えるなどとても進化している。

<墓>

どんどん墓が巨大化し、棺も大きく豪華になっていった。また、棺をそのまま埋めるのではなく、古墳内に部屋を作りそこに棺を置くため、副葬品を置きやすくなった。墓の内面だけでなく、外側の装飾の埴輪なども豪華になっていった。

<副葬品>

古墳時代になり、金や金銅で作られたきらびやかな副葬品が多く出土している。また、馬具も副葬されるようになった。甲冑なども副葬されるようになり、朝鮮半島のものと同じような甲冑も出土している。

渡来人や大和政権の技術者の協力により、格段と道具や住居、技術の質が上がり、生活が安定して快適になった。朝鮮半島との結びつきが強くなり、高度な技術や道具が群馬にもたらされた。馬を飼育する技術や鉄製の道具などが伝わり、よりよい暮らしが実現したと考えられる。

4.感想

古墳時代と弥生時代では、墓の形以外は大差ないと思っていたがかなりの違いがあって驚いた。また、古墳時代の遺跡は古墳しかないと思っていたが、けっこう住居や水田、豪族の館の遺跡があった。きらびやかな副葬品が今から1500年以上も前のものなのにとっても美しいデザインで、とても良い状態で残っていたので驚いた。群馬県の豪族の権力の強さにびっくりした。

5.出典

<書籍>

「東国文化副読本～古代群馬を探検しよう～」(2022年版 デジタル版) 発行:群馬県
群馬県公式はにわガイドブック「HANI-本」 発行:群馬県
群馬県立歴史博物館企画展解説書
第99回企画展「集まれ!ぐんまのはにわたち」
第101回企画展「綿貫観音山古墳のすべて」 二つとも発行:群馬県立歴史博物館
かみつけの里博物館常設展示解説書「よみがえる五世紀の世界」発行:かみつけの里博物館
「弥生時代の吉野ヶ里 -ムラからクニへ-」発行:佐賀県
「ビジュアル図鑑 日本の歴史」発行:学研

<施設>

「かみつけの里博物館」群馬県高崎市高松町35番地1
「国営吉野ヶ里歴史公園」佐賀県神埼郡吉野ヶ里町田手1843
「群馬県立歴史博物館」群馬県高崎市綿貫町992-1

<ウェブサイト>

群馬県公式デジタルはにわ図鑑「しらべるHANI-図鑑」
<https://hani-zukan.jp/>
国営吉野ヶ里歴史公園公式ウェブサイト
<https://www.yoshinogari.jp/>
百舌鳥・古市古墳群公式ウェブサイト
<https://www.mozu-furuichi.jp/>
日本の生活(縄文～江戸時代)「刀剣ワールド」
<https://www.touken-world.jp/>